
KINGDOM HEARTS - Replica's After Story -

パニラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KINGDOM HEARTS - Replicas After Story -

【Nコード】

N1339BA

【作者名】

パニラー

【あらすじ】

どこまでも続くどこでもない世界。
そこには今消えたはずの存在がたった一人で戦っていた。
かつて創られた存在たちの、終焉にもがく物語。

キングダムハーツの二次創作、リク「レプリカの物語です。

○ゲームをやっていないとよくわからないと思うので、一通り物語を知っているという方のみお読みください。

オリキャラは出す予定ですが未定です。

時系列は？と同じ時期ということ。

○とにかく駄文なのでアドバイス等もらえたら嬉しいです。

? 1 / 5 追記

No.0 プロローグ(前書き)

この作品はキングダムハーツの二次創作です。

完全オリジナルストーリーですが、完璧に作者の想像上なので本編には全く関係ありません。

No.0 プロローグ

深い闇の中。

俺はただ歩いてきた。

行き先などない。

進むべき道など、当に見失っているのだから。

この場所に来てから俺はどのくらい歩いたのだろうか。見渡す限り闇が続いているのだからそんなものはわかりはしないが。

「……闇、か」

俺は闇を恐れていない。怖がってる『アイツ』の方が腰抜けだ。そう思っていた。

けれど恐れるとか恐れなとか、結局は過去の経験 記憶に左右される。

『アイツ』は今まで戦ってきた記憶から、闇を恐れ、憎んでいた。それらが向けられているのは

「アンセム……！またお前か！」

この闇の空間 暗黒の庭園とも呼べる場所で唯一出会う人物。銀色の長い髪をなびかせ、腕を組み、佇んでいる。そしてその後ろには影が伸びたようにそこにいる化け物。また、奴の胸には紋章が刻まれている。

以前、『アイツ』の体に乗っかって復活し、闇を使って世界の征服を企んでいた張本人だ。

「何度来ても同じだ！」

俺は右手に悪魔の翼を型どったような剣 ソウルイーターを召還し、構える。

アンセムの後ろの悪魔の両手に青黒い光が集まる。

それを地面に叩きつけることで衝撃波を放った。

いつまでも同じ攻撃ばかり。もう飽きてきた。

俺は横にステップをして難なく避ける。
それでも悪魔は何度も攻撃を放つ。

数回同じ様に避けると、俺はアンセムに向かって勢いよく駆け出した。

すると、相手も急接近し、鋭く大きな爪を俺の頭に向けて振り下ろした。

「何度やっても同じだと、言ったはずだ」

その攻撃を体を捻ってかわしつつ、ソウルイーターをアンセムの胸に突き立てていた。

そして、声にもならない断末魔が響き渡らせ、アンセムは闇となつて消えた。

「……いつまで続くのか、この地獄は」

この世界に終わりなどない。それはここに俺という存在が出来たときからわかっていた。

俺は創られた存在。創られた体に創られた心、魂。

それは消えるといったどこに行くのか。

その答えは、俺自身。今この場所だ。

「この暗い闇の中で、永遠の時を過ごす。

それが世界に生まれた俺の罪への罰として、そして、世界の均衡のために。」

【レプリカ】はこうして死んでいく」

たった一人で。永遠に。

その罰はずっと続いていくと思っていた。

「ん？あれは……」

初めて、闇とアンセム以外のものが現れた。

上の方からガラスのような淡い光が降ってきたのだ。

やがて光はピースを組み立てパズルを作っていくかのように次第に大きくなっていき、最後には人の形にとどまった。

「……誰だ？」

光が治まっていき、完全に消えると一人の小柄な少女が残された。

なんだか、彼女には見覚えがあった。
というより彼女の格好には。

黒く短くまとまった髪の毛。それより目を引くのは黒いフード付きのコート。

「こいつ……??（じゅーさん）機関か！」

??機関。奴らは共通して同じ黒いコートに身を包んだ怪しげな集団。

忘却の城、という場所で何かを探したり、記憶を操って「キープレードの勇者」を我が物にしようといっていた。

そして、奴らは俺を創り出した。

そんな奴らと同じ格好をする者は基本的に闇に通ずる者しかいない。闇から身を守る防護服とも言われているが今は関係ない。

それよりも目の前の少女だ。

「おい！お前さっさと起きろ！」

俺は乱暴に肩を揺さぶりながら言う。

しかし、彼女は目を閉じたまま動かない。

死んでいるのか？

「……………んっ」

「……………いや、生きてるか」

ホッとした。人と久しぶりに接したのに死人だったら悲しいからな。

自然と笑みがこぼれたが、再び俺は彼女を起こそうと試みた。

「さあ、早く起きろ」

「んっ……………！」

反応が大きくなってきた。

やがて少女はゆっくりと瞼を持ち上げた。

「……………あれ？あなたは……………」

彼女との出会い。

これが俺の運命を動かすなんてこの時の俺は思ってもみなかった。

No.1 創られた者たち

俺はリクを元に創られた。

『俺はお前だからさ』

『俺は俺だ』

だから、その台詞を吐けるのが羨ましくてしかたがなかった。

『俺は俺 か。』

うらやましいな、本物は。偽物の俺には絶対言えない台詞だ』

俺がいくら頑張ったところで、いくら力を手にしたところで……

『そつだ！偽物なんだよ俺は！姿も記憶も気持ちも全部！それに、この新しい力も！』

偽物は偽物。本物には決してなれない。

『新しい力を手に入れたら、お前の偽物じゃなくて、別の誰かになれると思った！』

だけど、何も変わらない……空しいままだ！

やっぱりみんな、借り物なんだ』

だからこそ俺は戦って勝ちたかった。

『お前が存在する限り、俺は永久に影なんだッ！』

誰でもない『俺』になるために。

互いに剣をぶつけ合った。力の限り、全てをぶつけた。でも、勝てなかった。

『俺、滅ぶのか……』

何故だが、清々しい気分だった。

消えるという不安よりもその方が勝っていた。

『ふん。滅ぶのは怖くない。どうせ偽物なんだからな』

偽物は偽物。消えたとしても本物がいれば誰も悲しまない。

『本物の心なんて、持ってないんだ。今感じてる気持ちだったぶん、嘘の気持ちさ』

けれどそんな中浮かんだのは、ソラの顔。悲しげに歪む、アイツの顔。

そして、もう一つ。

ナミネ。

『何を感じてる？』

純粹な疑問なのか、それとも同情してるのか、そんなどっちとも取れる口調で『本物のリク』は俺に尋ねる。

俺は元々あつた気持ちの方を答える。

『偽物の俺が減んだら……俺の心、どこへ行くんだろうな……』

目の前に広がるオレンジ色に染まった空。それに溶けるようにして

『消えちまうのかな』

ふと漏れた言葉にリクが言う。

『どこかへ行くさ。』

たぶん、俺と同じ場所だ』

同じ顔。同じ声に同じ体。全て同じだけど、心は違う。

その心は、本物に帰るのか。

『ちっ……そんなところまで本物の真似かよ』

願うなら、消えないでほしい。

たとえ本物と同じ場所でも。

『まあ、いいか』

そうして『俺』という存在は消えた。

深い深い闇の中。意識が闇に溶けていく。

目を開けてみると、闇が広がっていた。単なる闇ではない。

ここは

「虚無の世界？」

私はずっと疑問に思ってた。自分という存在に、
ずつと願ってた。三人で、いつまでも幸せに過ごせることを。何
も、変わらずに。

でも、ダメだった。

私は存在してはいけなかった身。

ロクサスを元に創られた、レプリカだった。

それを知った私は本来あるべき場所に帰ろうとした。ソラの所へ。
でも私はロクサスの力を奪いすぎてしまった。

だから私はロクサスと戦って、負けて、あるべき場所に帰った。

「それなのに……」

ここはソラの心の中？

ううん。ソラの心はこんなに闇で満たされていないはず。

だったらここは？

そして、目の前のこの人は

「誰……？」

「俺は……」

答えようとして、口をつぐんだ。

何て言ってるのか、分からなかったからだ。

「……それより、自分から名乗るのが礼儀なんじゃないか？」

「あっ、ごめんなさい」

単なるごまかしでしかなかったが、少女は疑うことなく頷いた。

「私の名前はシオン」

しかし彼女、シオンは名前以上のことは語らない。

だが、俺には聞かなきゃいけないことがある。「??？機関か？」

一瞬驚いて目を見開いたが、すぐに落ち着き、再び頷いた。

「機関のNo.14、だった」

「だった？」

「私、消えちゃったから」

やはり、コイツも“訳あり”か。

これで一つ予想ができた。

「つまり、ここは死後の世界でもある、そういうことか」

このシオンとやらは俺と同じように消えた存在。

消えた後、俺はどこへ行くのかと疑問に思っていたがやはり消えるのは死ぬことと同義なのだろうか。

などと、考えを巡らせているとシオンが声をかけてきた。

「あの……」

「なんだ？」

「あなたは……リク、なの？」

その問いに俺は対して驚かなかった。

「リクを知っているのか？」 シオンは本物のリクに会っている。

それだけの事実だけで十分だ。

「えっ？あ、うん。前に、少しだけ」

「闇の力は使っていたのか？」

「ううん。それはわからない。少なくとも剣術だけで私よりも強かった」

「……そうか」

それを聞いて少しだけホッとした。

まだ、アイツは完全に闇に浸かってはいない。

いくら闇にもう怖じ気づかないからといって使うのはあまり勧められない。

もし次にアイツが本気で闇に頼ったら、それこそ大変なことになってしまう。

例えば、意識は乗っ取られなくとも体がアンセムになってしまう、とかな。

「ねえ」

……一人でいた時間が長かったからか、やけに考え込んでしまう。
「どうした？」

「それで……あなたの名前は？」

「やっぱりこれは聞かれるか。」

知人と同じ姿。怪しまれないわけがない。

だが、俺はその質問には答えられない。

「困ったな……」

「え？」

「俺には、呼んでもらえる名前がない」

「それってどういう」

「レプリカ」

「あつ……」

なんだ。レプリカのことも知っているのか。

いや、それも当然か。コイツは俺を創り出した機関の一人。話を聞いて、知っただけでもおかしくないだろう。

「創られた時はリクと呼ばれていた。けれど、それは本物の名だ。」

俺のものじゃない」

「……っ！そんな！」「同情は要らない。お前もその口だろ？」

「……」

俺は同情も同族も求めてはいないし、しゃべらない奴の秘密事に首を突っ込むお人好しでもない。

「まあいい。それよりお前戦えるか？」

その問いに頷き、シオンは右手を前にかざす。

すると、光が発し、鍵の形をした剣 キーブレードが現れた。

これにはさすがに驚かずにはいかなかった。

「なぜだ……なぜお前がキーブレードを……？」

キーブレードは選ばれし者だけが使える特別な武器。

今のところ使えるのがソラだけだったはず。

「私は普通の人間じゃないの」

「どうということ」

だ？と続けようとしたその瞬間、地面が揺れた。

「な、何ッ？」

「これは……」

すると、足元の闇が形を成して広がっていき大きな広場となった。そして、その中心にこれまた見知った顔が現れる。

「ハートレス！」

「ダークサイドか……!!」

漆黒の巨人のハートレス　ダークサイド。

味方ではない。完全なる敵だ。

シオンはキープレードを構えて攻撃体制をとる。

俺もソウルイーターを召喚して構えた。

「やっぱりここにもハートレスはいるんだ」

「いや、今まではいなかった」

「えっ？それってどういうこと？」

「シオン！」

するとここでダークサイドはその巨大な拳をシオンに振り下ろした。

咄嗟に反応し、シオンは攻撃を避ける。

「ありがとうリ……うっ……」

どうやらシオンは呼び方に困り口をつぐんでしまったようだ。

仕方がない。今だけ借りるぞ本物。

「リクでいい」

「えっ、でも！」

「俺のことなんか気にするな！ほら、次来るぞ！」

「あ、うん！」

ダークサイドは左手を俺に向けて振り下ろす。

しかし、それは地面を揺らすだけで当たりはしない。

俺は跳んでかわす。

「くらえ！」

そしてそのままの体制で魔法、ダークファイガを放った。

それはダークサイドの左手を捉え、大きな衝撃によって弾く。その隙にシオンが一閃。ダークサイドの肘から先が溶けるようにして消えた。

「なんだ、やるじゃないか」

「ありがとう。でも喜ぶにはまだ早いよ！」

「ふっ。それもそうだ！」

ダークサイドは左手を切断されたことでよろめき、膝をつく。隙だらけの体制。

「今だっ！」

チャンスを見逃さないために俺とシオンは同時に駆け出した。

しかし、敵もただでは終わらないようだ。

ダークサイドの右手が地面に沈んでいく。それによって生じた穴から、小型ハートレス シャドウが何体も現れた。

強くはない。ただの足の少ない蟻が二本足で立ったようなハートレスだ。

ただ、数が多くて厄介なだけ。

しかし、これでイライラさせられるかもしれない。そんな心配は杞憂だったらしい。

「えーい！」

少女らしい声と共に、キープレードが辺りを飛び交い、シャドウたちを蹴散らす。

最後にはしつかりと持ち主の手に戻った。

「こんなにカッコをつけられちゃたままないな」

冗談めかしく言うとシオンは照れ笑いを浮かべた。

ここまで大変なことを一人でやられてしまったかもしれない。

「俺も負けてられない」

心の中の闇を使い、俺は高く飛び上がった。

そして、そのまま落下して左肩。すぐに飛んで今度は右腕を切り落とす。

最後のトドメに頭を狙って剣を振りかぶる。
下でシオンがキーブレードを振るう瞬間。俺も同時にソウルイ
ター振り下ろした。

「ふう……なんかあったな」

「いきなり出てきて驚いちゃった」

「……お前も同じようにいきなり出てきたな」

「驚いた？」

「……なんとというか、あまり驚いてない」

「つまんない」

あの後、ダークサイドは跡形もなく消え、また元の世界へと戻っ
た。

今までと違うのは俺の隣にいる人物、シオン。

さっきの一戦を経て、俺たちは大分打ち解けて今や一緒に並んで
歩いている。

「それにしてもさっきは悩んだよ」

「何に？」

「何につて……あなたの名前」

「ああ、そんな事か」

過ぎたことをいつまでも気にしているなんて。生真面目なのか、
不器用なだけなのか……。いや、たぶんどっちもか。

しかし、シオンは俺の返答が不満だったのか、言い寄ってきた。

「そんな事なんて言わないで！名前がないなんて……悲しすぎるよ」
「前にも言っただろ？同情はいらないって」

「それでも……名前は大事。誰かに呼んでもらえるだけでも、嬉し
いから」

最終的に、俺が折れた。

そんな風に言われたら、もう勝ち目なんてない。

「わかった。ならお前が決めてくれ、シオン」

「え、えええ！？私が考えちゃっていいの！？」

「自分で言い出したことなのになんでお前が驚いてるんだ？」

「だって……名前はあなたの大切な事だよ！？なのに」

「お前さつき、名前を呼ばれたら嬉しいと言ったよな？」

言葉を遮って問うと、シオンは黙って頷いた。

「どうせ俺の名前を呼ぶのはお前しかいないんだ。だからお前が決めなさい」

これは決して俺にはセンスがないからとかじゃない。

コイツだからこそ任せるんだ。

少しだけだけど、ナミネに似ているから。

「キルア」

「え？」

「キルア。あなたの名前だよ」

「キルア、か。問題ない」

そうやって俺は再び足を動かし始めた。

「あ、待ってよキルア！」

「……やっぱり慣れないなそれは」

俺はきつと、この時からもう……偽物じゃない一人になっていたんだと思う。

けれどこの時の俺はその事に気づいてはいなかった。

No.2 記憶(前書き)

ここまで完全にオリジナルなのですが、違和感などがあつたらア
ドバイス等お願いします。

No.2 記憶

「あれはなんだ？」

歩き続けてどれくらい経ったか。

しかし、ここでおかしなものを見つけた。

「扉、かな？」

白色の扉がそこにはあった。

ただの扉だけ。後ろに建物とかはなにもない。

けれど、どこかに繋がっているという確信があった。

扉の取っ手に手をかけて開けようとする。

しかし、扉は固く閉ざされたままで開く気がしない。

「キルアどいて」

「む」

キープレードの切っ先を扉に向けてシオンが立っていた。

俺はすぐに意図がわかり、脇へ退く。

すると次の瞬間、キープレードの先端から光が発せられ扉へ突き刺さった。それと同時にガチャリと鍵が開いたような音がして光は消えた。

キープレードはあらゆるモノを開け閉めできる武器だったな。

「よし、行くぞ」

今は無駄なことを考えてる暇はない。

ただ、先へ進むだけだ。

白い部屋。真ん中にある台座を中心に部屋中に鎖の模様が張り巡らされている。

誰もいない。

否、話す者は誰もいない。
台座には一人、静かに眠る少年の姿が。
ふと一瞬、彼の指先がピクリと揺れた。
しかし、起きることはなく静かな部屋に彼の寝息だけが響き続ける。

「……！ここは！？」

「忘却の城！？」

右も左も上も下も全部白。挙げ句には柱や置物まで全て城に染められている。

忘れるはずもない。

俺が創られた場所。

「なんであの扉はここに繋がってたんだ？」

「わからない。忘却の城は光と闇の狭間にあるって聞いてたけど……」

…

「でもさっきの場所は明らかに闇の世界だったろ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1339ba/>

KINGDOM HEARTS - Replica's After Story -

2012年1月6日11時46分発行